ISSN-2188-0328　佐久大学 信州短期大学部紀要，第 25 巻，9-20（2014.3）

論文

介護福祉実習評価について三者評価を試みて
―第一段階実習評価から―

矢羽田　明美、三池　克明
（佐久大学信州短期大学部）

The comparison of the evaluation of the care welfare training by the teachers, the care workers and the students
– In the evaluation of the first stage training –

Akemi Yahata, Katsuaki Miike
(Department of Shinshu Junior College, Saku University.)

Abstract:The purpose of this study is reexamination of the evaluation method of the trainees in the care welfare training. In the general care training, the care workers and the teachers evaluate the trainees. The evaluation method is a questionnaire of Likert scale and the description method. However the method is often influenced by the subjectivity of the evaluator. Therefore the authors collected the trainee's evaluation of the teachers and the care workers as well as the self-evaluation of the students. Then the authors compared the trainee's evaluations by the teachers, the care workers and the students.

Keywords:care training instruction, care workers of the coaching staffs, teachers of the coaching staffs, self-evaluation, difference in the evaluation

I. はじめに

松山は「評価とは、実習の各段階を通じて所定の目標がどの程度達成されたかを、評価票に基づき客観的に評価するもの」[1] とある。介護福祉士養成において介護福祉実習は、専門性を身につけるために重要なものである。そのために、指導教員は、実習前後の指導及び巡回中、帰校日など、実習生の意欲や実習態度などに気を配っている。本学では今まで、実習終了後の評価は、施設の指導担当者（以下、施設担当者と記述）、大学に属する実習指導教員（以下、教員と記述）による成績に反映する評価を行ってきた。しかしこの評価方法そのものを検証する報告は少なく、実習生に対する評価が適切なのか検証する必要があると筆者らは考えた。

そこで本研究では、別に定める評価表に基づき、施設担当者、教員、実習を受けた学生（以下、実習生自身と呼称）の三者が、それぞれの立場から実習生の評価を行った。またそこから得られた実習生自身による自己評価（以下、実習生による自己評価と記述）あるいは教員・施設担当者による他者評価を分析し、そこから見えてくるものを明らかにした。そして明らかにした内容は、本学での今後の指導に活かしていく材料になるだけでなく、介護福祉教育の発展に役立つと筆者らは期待している。

II. 研究方法

本研究では実習生の評価者である①実習生自身、②指導教員、③施設担当者の三者を対象に質問紙による調査を行った。その詳細を表 1 に示す。

1. 調査対象者

実習生 46 人を実習生の居住地、実習先の位置、実習生が実習先への移動手段などの状況を踏まえ α 群 24 人（障害者施設、グループホームの順に実習）、β 群 22 人（グループホーム、障害者施設の順に実習）に分類した。また評価者の内訳は①実習生自身 46 人、②教員（全員が 5 年以上の指導経験を持つ）4 人、③施設担当者は実習先のグループホーム、障害者施設職員の指導担当者の代表者達である。

2. 調査期間及調査方法

実習生自身に対する調査は第 1 段階実習終了後の平成 25 年 11 月 21 日（第 1 クール実習終了後）と 11 月 30

表 1．実習生 46 人のグループ及び評価した三者からの回答回収状況

実習生と実習先 / 評価者	α群(24 人)		β群(22 人)	
	障害者施設	グループホーム	グループホーム	障害者施設
実習生自身	23(96%)	22(92%)	22(100%)	20(91%)
教員	24(100%)	24(100%)	22(100%)	22(100%)
施設担当者	24(100%)	24(100%)	22(100%)	22(100%)

※カッコ内は回収率、ただし無効回答も含む

日（第 2 クール終了後）に回答をお願いした。また教員は実習終了後の個別指導後に回答をお願いした。そして施設担当者は第 1 段階実習中（11 月 13 日～）に質問調査用紙を配布し、各実習生の実習終了後 1 か月以内に回答をするようお願いした。

2. 実習についての評価の質問調査表

一般的に用いられる施設用の評価表と学校用の評価表を統合して、共通の評価スケールの再検討及び修正を教員と筆者らが行った。項目の内容は、態度 3 項目、技術 2 項目、実習記録 3 項目、健康管理 2 項目及び総合評価とし、三者（実習生自身、教員、施設担当者）が共通の項目で評価できる内容にした。なお、実際に使用した質問調査票は文末に収録した。

3. 施設担当者への評価方法の説明と依頼

三者への調査の説明と依頼は、実習生自身や教員の場合は学内で行えるため比較的容易ではあるが、実習先の施設担当者は業務の合間にご協力頂くため、以下の方法で説明したうえで回答の依頼をした。

①第一段階実習終了時、担当教員が分担して各施設へ訪問し施設担当者に直接お会いして趣旨を説明し依頼する。

②第 1 クール・第 2 クールそれぞれの評価を行うよう説明する。

③施設担当者にお渡しする調査用紙は、実習学生の氏名を記入するように依頼する。

4. 倫理的配慮

調査の目的と個人的情報は一切開示しないことまた、本研究以外に使用しないことを調査用紙の文面及び口頭で説明することで、倫理的配慮を行った。

III. 分析方法について

本章では回収した質問調査紙の回答の集計・分析方法について述べる。

分析にあたり、回収できた回答から無効回答を除外した。その内訳は α 群では第 1 クール 22 人、第 2 クール 22 人、 β 群では第 1 クール 21 人、第 2 クール 19 人である。また 2 章 1 節で述べたように、 α 群は障害者施設・グループホームの順で、β 群はグループホーム・障害者施設の順で実習を受けている。そして各群の分類は各実習生の居住地や移動手段、実習先である施設の状況（自動車使用の可不可、受入可能人数など）を踏まえて教員が決定した。

そのため実習先である施設が障害者施設あるいはグループホームでは施設担当者や施設の意義・目的はそれぞれ異なっており、また実習を行った時期も異なるため、各クールによる比較に意味は無いと判断し分析対象から除外した。また両群の実習生の特性が等質であることは保証できないため、両群による比較も分析対象から除外した。

そこで本研究では各クール・施設での実習生による自己評価、教員による評価、施設担当者による評価を比較した。

1. 各クール、各施設、各評価者別の CS 分析

はじめにクール・実習先・評価者別の CS 分析 (2) を行った。本来、CS 分析（Customer-Satisfaction Analysis）とは顧客満足向上を目指す為の意思決定に用いられるもので、主としてビジネス系の分野で用いられるが、本研究の目的である三者による評価基準の分析に有効であると筆者らは判断し活用することにした。その結果を図 1 図 2 に示す。

横軸は各設問と総合評価との決定係数 R^2（相関係数 r を 2 乗したもの。$0 \leqq R^2 \leqq 1$）で、この数値が 0（グラフでは左側）に近いほど、その設問回答と総合評価の回答との相関は無く、逆に 1（グラフでは右側）に近いほど強い相関を示す。縦軸は各設問（ただし総合評価を除く）の評価回答の平均値であり 1（グラフでは下側）に近いほど評価が低く）、逆に 5（グラフでは上側）に近

いほど評価が高いことを示す。

この２つの数値を２次元にプロットすることで、以下の内容を読み取ることが可能になる。

第１に決定係数 R^2 が高く評価平均値が高い場合（点の位置が右上に寄る）、その評価項目は評価が高い傾向があり、そして総合評価に影響しやすいといえる。これを実習生指導に当てはめると、指導は行き届いており、総合評価にも反映されると考えられ、十分に指導が出来ていると判断できる。

第２に決定係数 R^2 が低く評価平均値が高い場合（点の位置が左上に寄る）、その評価項目は評価が高い傾向があり、そして総合評価に影響しにくいといえる。これを実習生指導に当てはめると、指導は行き届いているが、総合評価に反映されにくいと考えられ、指導に力を入れるべきかどうか検討する余地があると判断できる。

第３に決定係数 R^2 が低く評価平均値が低い場合（点の位置が左下に寄る）、その評価項目は評価が低い傾向があり、そして総合評価に影響しにくいといえる。これを実習生指導に当てはめると、指導は行き届いてないが、同時に総合評価に反映されにくいと考えられ、この指導の必要性を検討する必要があると判断できる。

第４に決定係数 R^2 が高く評価平均値が低い場合（点の位置が右下に寄る）、その評価項目は評価が低い傾向があり、そして総合評価に影響しやすいといえる。これを実習生指導に当てはめると、指導は行き届いておらず、そして総合評価に反映されやすいと考えられるため、この評価項目に関する効果的な指導が必要であると判断できる。

ただし上記第１～第４の目安は CS 分析の一般論を踏まえた解釈の一例である。本研究の場合、第１章で述べたとおり、評価者が実習生自身・教員・施設担当者の三者であり、それぞれの経験や価値観などから評価の基準や総合評価を判定する際に重視する要素が異なる可能性があり、それを明らかにすることである。

以上を踏まえて、図 1A、図 1B、図 2A、図 2B の各グラフにプロットされている点の位置をそれぞれ比較してみると、三者それぞれ各項目評価の平均値と総合評価との決定係数に違いが見られる。

例えば図 1A では実習生自身は各設問の評価平均が他者と比べて高く、決定係数は低いことがわかる。これは実習生自身の自己評価が他者と比べて高い可能性を示し、同時に総合評価を決定する基準が、今回の設問を踏まえていない可能性を示している。この傾向は図 2A でも現れていることが分かる。

また図 1B では教員は他者と比べて各設問の決定係数が高い。これは各設問の評価回答を踏まえて総合評価を決定している可能性を示している。この傾向は図 2B でも同様の傾向を示している。これは、そもそも今回のアンケート調査の質問項目は教員が検討し決定している。そのため、このような結果になるのは当然であろう。

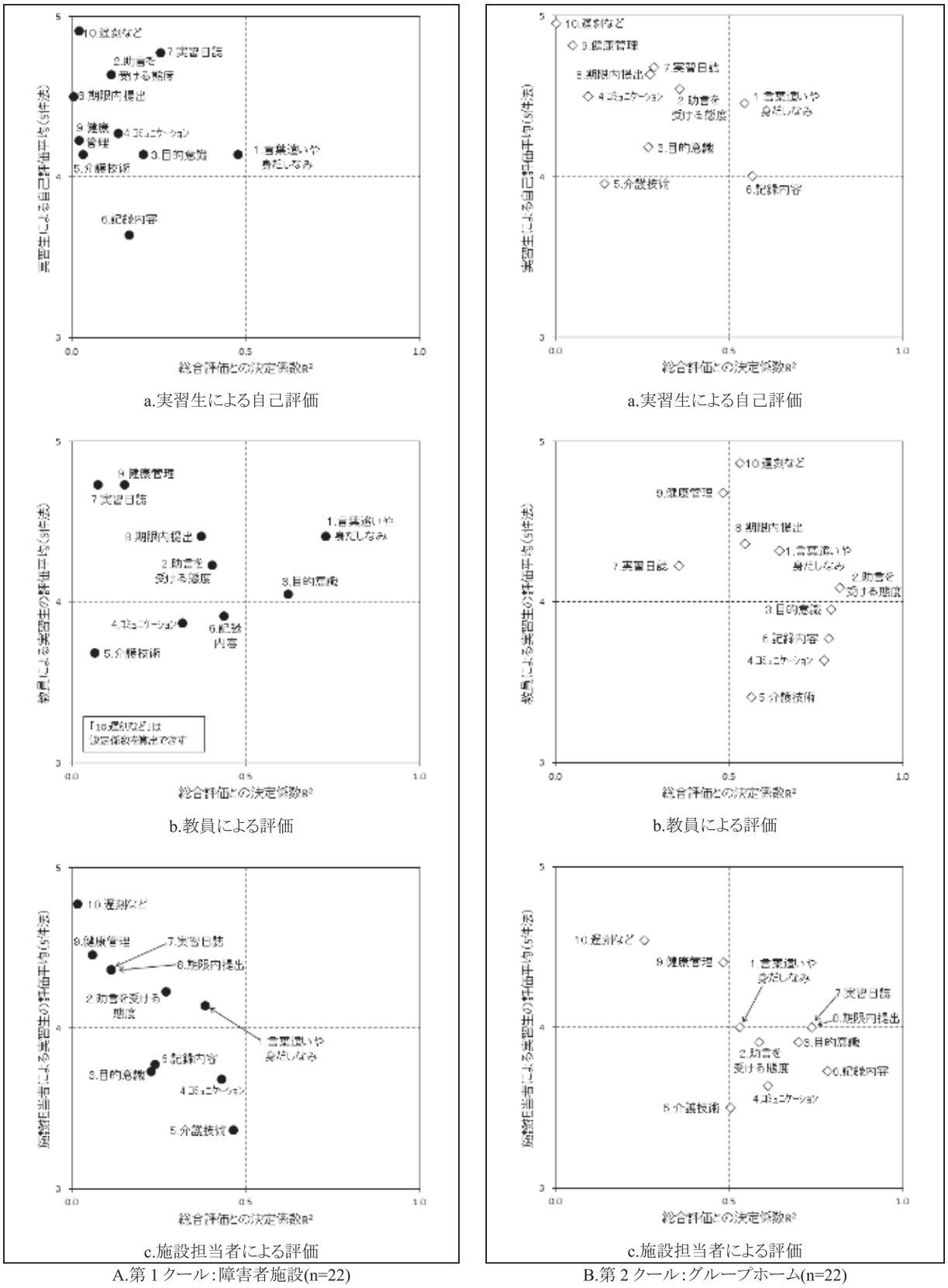
2. 三者による評価平均の有意差の分析

CS 分析によって、三者の評価傾向について大まかな違いが明らかになった。しかしこのデータだけでは単なる偶然である可能性を否定できない。そこで CS 分析によって明らかになった傾向について有意差の検定を行った。検定を行うにあたり、今回のアンケート調査で回収したデータは順位尺度であり、また正規分布とは言い切れないことから、ノンパラメトリック検定の一種である Mann-Whitney 検定 [3] を用いた。各群における三者による各設問の評価回答平均の検定結果の有意確率の一覧を表２表３に示す。

α 群の第１クール・障害者施設実習の評価は表２に示すとおり、三者間での有意差（$p<0.10$）が現れた項目数は教員 - 実習生間で５項目、施設担当者 - 実習生間で３項目、教員 - 施設担当者間で４項目であった。また設問 5「利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した」については三者間で $p<0.10$ の有意差が見られ、この評価項目については三者の評価基準に大きな隔たりがあることが明かである。そして設問 11「実習生の総合評価」では教員間 - 実習生間と教員 - 施設担当者間で $p<0.10$ の有意差が見られ、特に教員と施設担当者で総合評価に有意差が見られたことは、今後の実習指導方針について検討の必要が明らかになったと考えられる。

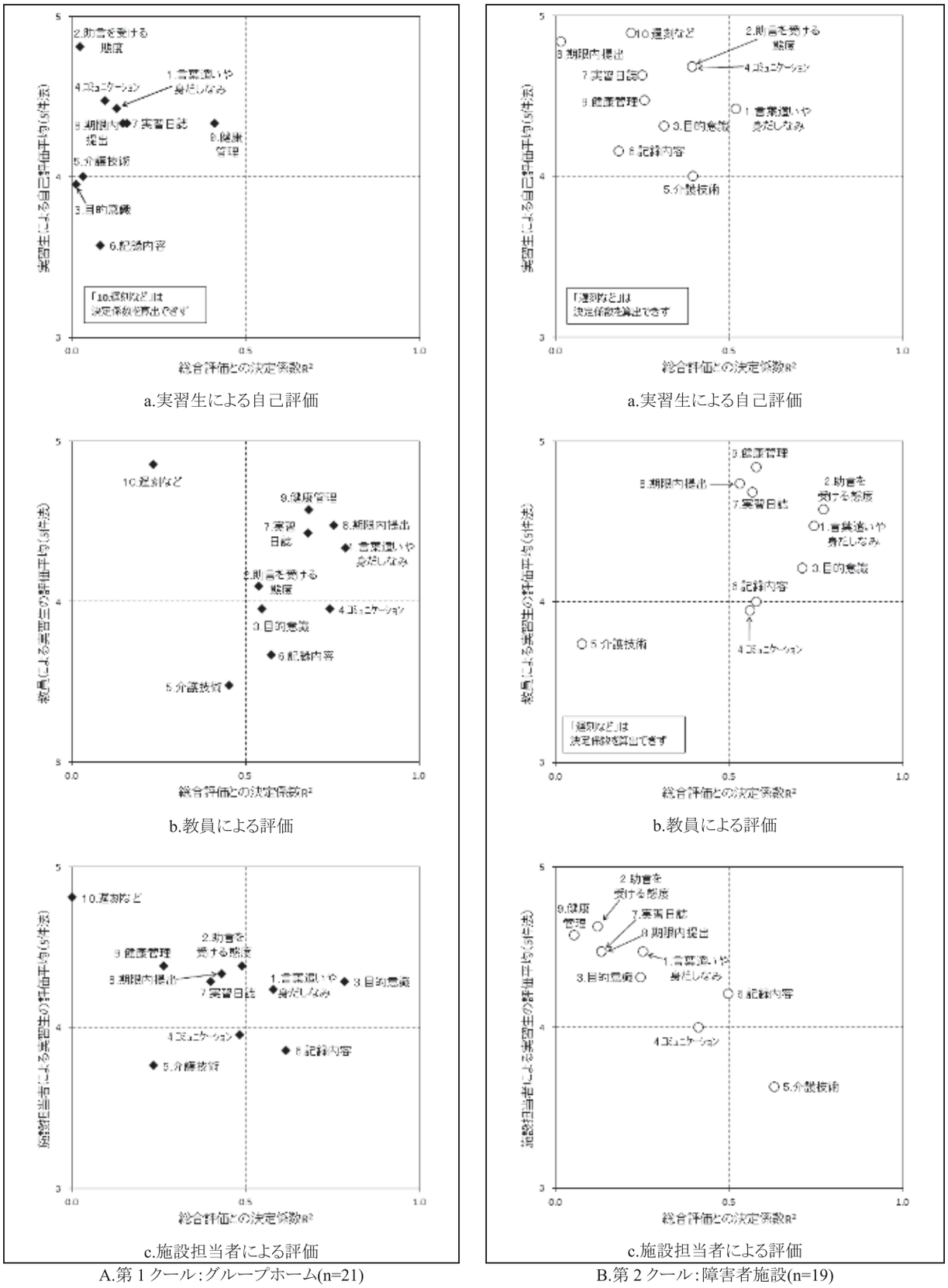
また第２クール・グループホーム実習の評価は表２に示すとおり、三者間での有意差（$p<0.10$）が現れた項目数は教員 - 実習生間で４項目、施設担当者 - 実習生間で７項目、教員 - 施設担当者間で１項目とバラツキが見られた。また実習生と教員・施設担当者で有意差が見られ、そして教員と施設担当者で有意差があまり見られなかったのは、それぞれの知識や経験の差が影響している可能性を示していると考えられる。

一方で β 群の第１クール・グループホーム施設実習の評価は表３に示すとおり、三者間での有意差（$p<0.10$）が現れた項目数は教員 - 実習生間で４項目、施設担当者 - 実習生間で５項目、教員 - 施設担当者間で０項目とバラツキが見られた。これは図１に示した α 群の第２クール・グループホームと傾向が似ていることから、同様に



A.第 1 クール：障害者施設(n=22)　　B.第 2 クール：グループホーム(n=22)

図 1.　α群（障害者施設→グループホームの順に実習を受けた）の各評価と総合評価との決定係数



a.実習生による自己評価

b.教員による評価

c.施設担当者による評価

A.第 1 クール：グループホーム(n=21)

a.実習生による自己評価

b.教員による評価

c.施設担当者による評価

B.第 2 クール：障害者施設(n=19)

図 2.　β 群（グループホーム→障害者施設の順に実習を受けた）の各評価と総合評価との決定係数

表 2. α群の各評価の有意確率 p（両側確率）

設問＼施設		障害者施設 (n=22)			グループホーム (n=22)		
分類	設問内容（回答は、1:そう思わない～5:そう思う、の 5 件法）	教員と実習生	施設担当者と実習生	教員と施設担当者	教員と実習生	施設担当者と実習生	教員と施設担当者
態度	1 挨拶、言葉遣い、身だしなみは適切であった	0.19	0.76	0.37	0.72	0.14	0.30
	2 指導や助言を素直に受け入れる姿勢・態度であった	**0.04**	0.11	0.79	**0.03**	**0.03**	0.86
	3 目的意識を持って積極的な態度で実習に臨んだ	0.52	**0.10**	0.18	0.33	0.61	0.77
技術	4 利用者との適切なコミュニケーションを図るよう努めた	**0.03**	**0.01**	0.30	**0.00**	**0.00**	0.80
	5 利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した	**0.02**	**0.00**	**0.09**	**0.04**	**0.04**	0.90
実習記録	6 各記録の内容は適切な内容で記載した	0.14	0.65	0.60	0.49	0.50	0.98
	7 実習日誌は毎日記録し毎日提出した	0.73	0.40	0.60	**0.04**	**0.00**	0.34
	8 全ての記録を期限内に提出した	0.91	0.90	0.99	0.33	**0.01**	0.11
健康管理	9 自身の心身の健康管理ができていた	**0.07**	0.65	**0.08**	0.83	**0.04**	0.10
	10 欠席・遅刻・早退することなく実習に取り組んだ	0.15	0.22	**0.02**	0.54	**0.01**	**0.04**
総合	11 実習生の総合評価	**0.08**	0.66	**0.06**	0.32	0.44	0.16

※p<0.10 は太字、p<0.05 は下線太字で表記

表 3. β群の各評価平均の有意確率 p（両側確率）

設問＼施設		グループホーム (n=21)			障害者施設 (n=19)		
分類	設問内容（回答は、1:そう思わない～5:そう思う、の 5 件法）	教員と実習生	施設担当者と実習生	教員と施設担当者	教員と実習生	施設担当者と実習生	教員と施設担当者
態度	1 挨拶、言葉遣い、身だしなみは適切であった	0.97	0.52	0.57	0.56	0.77	0.78
	2 指導や助言を素直に受け入れる姿勢・態度であった	**0.00**	**0.02**	0.22	0.52	0.74	0.75
	3 目的意識を持って積極的な態度で実習に臨んだ	0.75	**0.09**	0.15	0.68	0.81	0.49
技術	4 利用者との適切なコミュニケーションを図るよう努めた	**0.09**	**0.04**	0.82	**0.00**	**0.01**	0.56
	5 利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した	**0.08**	0.35	0.32	0.22	0.18	0.78
実習記録	6 各記録の内容は適切な内容で記載した	0.52	**0.06**	0.52	0.37	0.67	0.25
	7 実習日誌は毎日記録し毎日提出した	0.78	0.47	0.36	0.51	0.83	0.65
	8 全ての記録を期限内に提出した	0.71	0.42	0.21	0.75	0.59	0.38
健康管理	9 自身の心身の健康管理ができていた	0.28	0.90	0.31	0.12	0.86	**0.08**
	10 欠席・遅刻・早退することなく実習に取り組んだ	**0.08**	**0.04**	0.68	0.32	0.32	1.00
総合	11 実習生の総合評価	0.17	0.45	0.45	0.11	0.86	0.13

※p<0.10 は太字、p<0.05 は下線太字で表記

三者それぞれの知識や経験の差が影響している可能性を示していると考えられる。

また第 2 クール・障害者施設実習の評価は表 3 に示すとおり、三者間での有意差（p<0.10）が現れた項目数は三者間でそれぞれ 1 項目であった。他の群やクールと比較すると、有意差がほとんど見られなかったが、これは有意差が見られないだけであって、「同じ評価をしている、とは言い切れない」点に注意が必要である。何故このような結果になったかは、本章の冒頭で述べたとおり、両群の特性の違いや施設担当者が異なる為と推測できるが、今回の調査だけでそれを証明することは困難である。

3. 三者による決定係数 R^2 の有意差の分析

評価平均の有意確率の分析だけでなく、総合評価を決める要素を示す決定係数についても、三者間の有意差の検定を行った。こちらも前節と同様に Mann-Whitney 検定 (2) を用いた。その結果を表 4 に示す。α群での三者間での有意差（p<0.10）が現れた項目数は教員 - 実習生間で 2 項目全て、施設担当者 - 実習生間で第 2 クール・グループホームのみ、教員 - 施設担当者間は 0 項目であった。これは実習生と教員あるいは施設担当者では総合評価を決める基準が異なることを示しており、三者それぞれの知識・経験・意識の差が影響している可能性を示していると考えられる。

その一方でβ群では三者全てに有意差（p<0.10）が現れた。これは三者全てがそれぞれ異なる基準で総合評価を決めていることを示している。特に教員 - 施設担当者

表 4. 各設問−総合評価の決定係数 R^2 の有意確率 p（両側確率）

群（実習順）	施設	教員と実習生	施設担当者と実習生	教員と施設担当者
α群（障害者施設→グループホーム）	第 1 クール：障害者施設	**0.07**	0.20	0.40
	第 2 クール：グループホーム	**0.00**	**0.00**	0.63
β群（グループホーム→障害者施設）	第 1 クール：グループホーム	**0.00**	**0.00**	**0.05**
	第 2 クール：障害者施設	**0.00**	**0.57**	**0.02**

※p<0.10 は太字、p<0.05 は下線太字で表記

で評価基準が異なる点について「異なることは教育上の問題になる」と判断すべきか「価値観が異なることは人として当然で、受容する心構えが必要である」と判断すべきか検討の余地があり、その際には介護福祉に関する法的基準や資格取得の基準に照らし合わせて検討すべきだろう。

IV. 考察

評価の方法は、評価表に基づき、実習生自身、教員、施設担当者の三者が、それぞれの立場から評価を行い、特に実習生による自己評価と教員・施設担当者による他者評価との違いを面接によって努めて客観性のある評価につくりあげ、どちらかの立場による一方に偏した評価にならないよう配慮された方法となる。

1. 各クール、各施設、各評価者別の CS 分析について

図 1 AB から、実習生による自己評価の各設問項目の評価平均が高く、特に普段の生活で経験するような項目（例えば「遅刻など」）について評価平均が高い傾向にある。これは、普段の生活から学ぶ事柄に対し、専門的な知識や技術的な事柄についての指導が不足している可能性があると考える。

教員による評価は、各設問項目の評価について、決定係数が高いことから、各教員が到達目標の基準を設定して評価していることから総合評価にも反映されていると考える。以上を踏まえると、教員と実習生の評価の差を調整する必要があり、そのためには教員・実習生の個別面接等で客観的な評価を検討していく必要があると考える。

2. 三者による評価平均の有意差の分析

α群の第 1 クール・障害者施設実習では、有意差が現れた項目の内容は、表 2 に示すとおり教員 - 実習生間では 5 項目の①助言を受ける態度、②コミュニケーション、③介護技術、④健康管理、⑤総合評価、であった。また施設担当者 - 実習生間では、3 項目の①目的意識、②コミュニケーション、③介護技術であった。そして教員と施設担当者では 4 項目の①介護技術、②健康管理、③遅刻など、④総合評価であった。以上の評価項目について、図 1 A を踏まえて述べると、教員や施設担当者は実習生に比べて評価が厳しい傾向にあることが分かった。特に実習生の実習に対する目的意識に対し、施設担当者は実習生自身よりも低い評価をすることが明らかになった。これについては、当然ながら本学の授業の中で各実習段階の実習目的について実習要綱を通して指導しているが、実習目的の意識付けをどのように行っていくか今後も教員間での指導方法のあり方を検討する必要があると考える。コミュニケーションや介護技術については、第 1 クール、すなわち初めて現場での実習を受ける実習生にとって経験が無いことであり、できなくて当たり前であると考える。よって実際に実習を通して身につけることができる項目であり、実習生自身に自覚を促すと同時に、今後の成長を見守っていく指導が必要であると考える。

続いて第 2 クール・グループホーム実習では、実習生 - 教員間では、4 項目で①助言を受ける態度、②コミュニケーション、③介護技術、④期限内提出であった。また施設担当者 - 実習生間では 7 項目の①指導や助言、②コミュニケーション、③介護技術、④実習日誌、⑤期限内提出、⑥健康管理、⑦遅刻などであった。そして教員 - 施設担当者間では 1 項目の①遅刻などであった。以上の評価項目について図 1B を踏まえて述べると、施設指導者は教員や実習生に比べて欠席・遅刻の評価が厳しいことが分かった。教員は、遅刻や欠席は報告をする必要がある範囲で評価をしているが、施設担当者は実習生の入室時間等の実習に臨む姿勢をより厳しい基準をもって判断しているのではないかと考えられる。当然ながら本学でも実習前に、実習先への入室は 15 分前とし、遅く

ても５分前には準備を終えてステーションに待機するようにと指導しているが、実習生の中には、時間ぎりぎりに着いている可能性もある。この場合、実習の基準で見れば問題ないが、施設担当者にとっては、例え実習でも正規職員と同等の時間感覚を持って実習に臨むことを期待していると考えられ、それを踏まえた指導が重要であると考える。また「助言を受ける態度」も低い傾向にあった。これは、第１クールと異なり課題が新たに加わっていることから、課題をこなすことで精いっぱいになっているのではないかと考えられる。これについては今後の実習の指導内容を検討する必要があると考える。

β群の第１クール・グループホーム実習では、有意差が現れた項目の内容は、表３に示すとおり教員 - 実習生間では、4 項目の①助言を受ける態度、②目的意識、③コミュニケーション④遅刻などであった。施設担当者 - 実習生間では５項目の①助言を受ける態度、②目的意識、③コミュニケーション、④記録内容、⑤遅刻などであった。また教員 - 施設担当者間では０項目であった。以上の評価項目について図 2A を踏まえて述べるとコミュニケーションの評価について、教員や施設担当者は実習生自身よりも評価が厳しい傾向にあることが分かった。グループホームの利用者は認知症であるが、長谷川は「認知症ケアの原則の中で、そのすべての基盤になるのが、本人に接する際のかかわりである」[(4)] と述べている。そのため利用者の尊厳を支えるケアを実践するには、介護職員が利用者に対する関わり方が重要であり、その認識の違いや未熟さがコミュニケーションの評価を厳しくしたと考えられる。この評価項目は実習生として、またこれから介護福祉士として業をなす資質として大切な項目であり、指導の中で重点項目として対応していく必要がある。

続いて第２クール障害者施設では、実習生・教員・施設担当者の三者間で各１項目あり教員 - 実習生間では①コミュニケーション、施設担当者 - 実習生間では、①コミュニケーション、教員 - 施設担当者間では①健康管理であった。初めての施設実習で年齢差のある方とのコミュニケーションは困難であり、できないのは当然の結果である。そこで、これからの実習や学生生活の中でコミュニケーション力の必要性を実習生自身が自覚し、そして身につけていけるよう指導していく必要があると考える。

3. 三者による決定係数の有意差の分析

表３に示すとおり、α群・β群とも教員と施設指導者の評価では判断基準が異なることが分かった。これは実習生と教員・担当者だけでなく、教員と施設担当者でも実習生の総合評価を決める基準が異なると考えられる。まずは、この判断基準に違いがどの要因から生じているのかを明らかにすべきだろう。その手段については統計手法の一つである因子分析が適切であると考える。また、要因が明らかになった場合、次に判断基準の違いを「価値観の違い」として受容すべきか、あるいは両者のすり合わせをすべきなのかを検討する必要があると考える。

V. まとめ

評価について実習生自身の自己評価を高くつける傾向にあり、教員は総合的な評価を踏まえて各項目の評価を行っていることから、実習生と教員の評価尺度や基準が異なることが分かった。実習生と教員の評価と合わせて施設担当者の評価を参考に客観的な評価について個別指導していくことが重要であることが分かった。評価は一方的な評価でも押しつけられる評価であってもならない。実習生が次の実習に活かせ、更に介護福祉士に求められる資質の向上につながる指導評価を行うことが重要である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、佐久大学信州短期大学部介護福祉学科 2013 年度１年生の皆様、彼らの実習指導を担当した教員の皆様に記して感謝申し上げます。また実習先として受入れてくださった障害者支援施設やグループホームの職員や利用者の皆様、そして実習生指導を担当して下さった職員の皆様に記して感謝申し上げます。

[参考文献]

(1) 松山洋子．介護福祉実習指導．建帛社．pp.111. 2003 年
(2) 柏木吉基．Excel で学ぶ意思決定論．オーム社．2006 年.
(3) 市原清志．バイオサイエンスの統計学．南江堂．1990 年.
(4) 長谷川和夫．認知症の理解．建帛社．pp.90. 2011 年.
(5) 片山　徹，水谷なおみ．人―環境の相互作用に基づく介護福祉実践について．介護福祉教育．No.34. 2013 年.
(6) 田家英二．実習を通しての自己評価と自己受容につ

いて．介護福祉教育．No.22．2006 年.

付録１．質問調査用紙（実習生用）

介護総合実習　第一段階実習終了後

第一段階実習（障害者施設・グループホーム）実習終了後評価【実習生】

本アンケートの回答は、本学における教育活動ならびに研究活動の参考にしますが、あなたの成績には反映いたしません。つきましては実習期間中における自身に対し、以下の設問の率直な回答をお願いいたします。**本学学生の指導の参考や研究活動以外に使用することはございません。回答内容を論文・研究発表などで公開する場合は、回答者・回答者の属する施設・実習生に関する情報は開示しません。**

学籍番号＿＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　記入日　＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

A. 実習中の自身に対する以下の設問について、該当する番号に〇印を付けて下さい。どちらとも言えない場合は「３」に〇印を付けて下さい

分類	番号	設問	回答 ←思う 思わない→ ５ ４ ３ ２ １
態度	1	挨拶、言葉遣い、身だしなみは適切であった	５ ４ ３ ２ １
	2	指導や助言を素直に受け入れる姿勢・態度であった	５ ４ ３ ２ １
	3	目的意識を持って積極的な態度で実習に臨んだ	５ ４ ３ ２ １
技術	4	利用者との適切なコミュニケーションを図るよう努めた	５ ４ ３ ２ １
	5	利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した	５ ４ ３ ２ １
実習記録	6	各記録の内容は適切な内容で記載した	５ ４ ３ ２ １
	7	実習日誌は毎日記録し毎日提出した	５ ４ ３ ２ １
	8	全ての記録を期限内に提出した	５ ４ ３ ２ １
健康管理	9	自身の心身の健康管理ができていた	５ ４ ３ ２ １
	10	欠席・遅刻・早退することなく実習に取り組んだ	５ ４ ３ ２ １
総合	11	実習中の自身への総合評価	５ ４ ３ ２ １

B. その他記述すべき事項がある場合はこちらにご記入ください

ご協力ありがとうございました。【佐久大学信州短期大学部　介護実習担当教員一同】

付録 2. 質問調査用紙（教員用）

介護総合実習　第一段階実習終了後

第一段階実習（障害者施設・グループホーム）実習終了後評価【担当教員】

当アンケートの回答にご協力ください。なお、本回答から得たデータは、**本学学生の指導の参考や研究活動以外に使用することはございません（また指導の場合であっても本回答を当該学生に開示しません）。もし回答内容を論文・研究発表などで公開する場合は、回答者・回答者の属する施設・実習生に関する情報は開示しません。**

学籍番号＿＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　記入日　＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

A. 当該学生に対する以下の設問について、該当する番号に〇印を付けて下さい。どちらとも言えない場合は「３」に〇印を付けて下さい

分類	番号	設問	回答 ←思う 思わない→ 5 4 3 2 1
態度	1	挨拶、言葉遣い、身だしなみは適切であった	5 4 3 2 1
	2	指導や助言を素直に受け入れる姿勢・態度であった	5 4 3 2 1
	3	目的意識を持って積極的な態度で実習に臨んだ	5 4 3 2 1
技術	4	利用者との適切なコミュニケーションを図るよう努めた	5 4 3 2 1
	5	利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した	5 4 3 2 1
実習記録	6	各記録の内容は適切な内容で記載した	5 4 3 2 1
	7	実習日誌は毎日記録し毎日提出した	5 4 3 2 1
	8	全ての記録を期限内に提出した	5 4 3 2 1
健康管理	9	自身の心身の健康管理ができていた	5 4 3 2 1
	10	欠席・遅刻・早退することなく実習に取り組んだ	5 4 3 2 1
総合	11	当該学生の総合評価	5 4 3 2 1

B. 当該学生に関して、その他記述すべき事項がある場合はこちらにご記入ください

ご協力ありがとうございました。【佐久大学信州短期大学部　介護実習担当教員一同】

付録 3. 質問調査用紙（施設担当者用）

介護総合実習　第一段階実習終了後

第一段階実習（障害者施設・グループホーム）実習終了後評価【指導担当者様】

指導担当者様へ

この度は本学学生の実習指導にご協力いただき誠にありがとうございます。つきましては本学における教育活動ならびに研究活動の参考のためにアンケートの回答にご協力下さい。なお本回答から得たデータは、**本学学生の指導の参考や研究活動以外に使用することはございません（また指導の場合であっても本回答を当該学生に開示しません）。もし回答内容を論文・研究発表などで公開する場合は、回答者・回答者の属する施設・実習生に関する情報は一切開示しません**。

実習生氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　　記入日＿＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

A. 実習生について、該当する番号に〇印を付けて下さい。どちらとも言えない場合は「３」に〇印を付けて下さい

分類	番号	設問	回答 ←思う　思わない→ ５　４　３　２　１
態度	1	挨拶、言葉遣い、身だしなみは適切であった	５　４　３　２　１
	2	指導や助言を素直に受け入れる姿勢・態度であった	５　４　３　２　１
	3	目的意識を持って積極的な態度で実習に臨んだ	５　４　３　２　１
技術	4	利用者との適切なコミュニケーションを図るよう努めた	５　４　３　２　１
	5	利用者にあわせた介護技術を（指導を受けて）提供した	５　４　３　２　１
実習記録	6	各記録の内容は適切な内容で記載した	５　４　３　２　１
	7	実習日誌は毎日記録し毎日提出した	５　４　３　２　１
	8	全ての記録を期限内に提出した	５　４　３　２　１
健康管理	9	自身の心身の健康管理ができていた	５　４　３　２　１
	10	欠席・遅刻・早退することなく実習に取り組んだ	５　４　３　２　１
総合	11	実習生の総合評価	５　４　３　２　１

B. 実習生に対して、その他記述すべき事項がある場合はこちらにご記入ください

ご協力ありがとうございました。【佐久大学信州短期大学部　介護実習担当教員一同】